空間・社会・地理思想 12号，13-20頁，2008年
Space, Society and Geographical Thought

言説概念を介してみる 人文地理学者のアイデンティティ ―日本の地理学者に対する意識調査の解釈から―

成瀬 厚*，香川 雄一**，杉山 和明***

NARUSE Atsushi, KAGAWA Yuichi, SUGIYAMA Kazuaki
The Identity of Human Geographer
with the Intervention of the Concept of Discourse:
Focusing the Interpretation of the Consciousness Research
for Japanese Geographers

キーワード：言説，質問票，人文地理学者のアイデンティティ，コミュニケーション
Key word: discourse, question sheet, identity of human geographer, communication

Ⅰ はじめに

筆者たちは，2005 年の日本地理学会春季学術大会で「日本の地理学における言説分析の現状と課題」という報告を行い，その内容を成瀬ほか（2007）として発表した。このなかで日本の地理学者の論文を多数検討するのと並行して，学会発表前の 2005 年 2 月下旬に検討対象の論文著者に対し，言説概念についての意識に関する質問票を配布した。本稿では，その結果を紹介するとともに，こうした実践の意義について考察したい。質問票は筆者たち 3 人を含めた 25 名の著者（共著論文に対しては第一著者）に対して電子メールで配布し，16 名から回答をいただいた。質問は以下のような内容である。

1. あなたの上記論文 1)について
   a. あなたは論文中で「言説」の語を用いていますか？
   b. あなた自身はこの論文の（一部の）方法を言説分析だと思っていますか？
   c. その方法は既存のどんな研究から学んでいますか？
2. 言説という概念について
   a. あなたの理解の範囲で，この概念を説明してください。
   b. この概念について思い浮かぶ思想家や研究者を挙げてください。
   c. それらの著者の作品を読んだことがありますか？
   d. 地理学者の研究で言説概念を援用したものを知っていれば挙げてください。

成瀬ほか（2007）はいわば，日本の地理学者による言語資料研究のテクスト分析であった。日本の地理学における言語資料研究の現状について理解するためには，テクスト分析に限定される必要はなく，著者たちとのコミュニケーションをはかることも有

* 東京経済大学非常勤講師
** 滋賀県立大学
*** 大阪市立大学都市研究プラザ G-COE 特別研究員

意義だと考えられる。今回の調査票の送付はそうしたコミュニケーションの一部であり，また 2008 年の日本地理学会春季学術大会での口頭発表，およびそれに対する質疑応答もその一環である。こうした実践のなかで，近隣諸科学や英語圏人文地理学のように日本の地理学においても言説分析の方法論的議論を進展させたい，というのがこの質問票配布の目的であった。

世代や専門分野，論点はそれぞれ異なってはいるものの，筆者たちの試みと同様に独自の手法によって，国内外の地理学の状況を理解しようとする論考がここ数年相次いで発表されている。

日本の状況については，1975 年生まれの泉谷洋平が，日本の人文地理学において長年自明視されてきた論文構成を問題にし，「地名のない地理学」の可能性を提言しようとしている（泉谷，2004）。さらに，パラダイム概念を再検討し，経験的営みのなかで反復して用いられる模範例こそがパラダイム概念の核心だとした上で，人文地理学会の学術大会における一般研究発表の表題を分析することを通じて，人文地理学の典型的な模範例を抽出し，「われわれは何を模範例として『人文地理学らしいもの』と『人文地理学らしくないもの』を区別できるようになるのか」（p.5）を見極めようとしている（泉谷，2006）。これらの作業は，日本の人文地理学のアイデンティティを探求する実践としても捉えることができるだろう。一方で，『人文地理』に新設された種別「フォーカス」において，1949 年生まれの阿部和俊は，学術論文と単行本を対象とし，個別に設定した指標に基づく引用分析を中心として，近年ある意味では隣接分野との境界が曖昧になっていくことに対して人文地理学のアイデンティティの危機感を示している（阿部，2007）。

英語圏の状況については，1961 年生まれの山崎孝史が，研究者の立場性や学術雑誌の在り方をめぐる英語圏政治地理学における近年の４つの論争において，政治的なものがどこに見出され，それがいかにして働くのかを，独自に知りえたインフォーマルな情報も交えつつ明らかにした上で，これらの論争が，研究者が日常的に行う学術活動が持つ社会政治的な含意を内省する手がかりを提供していると主張している（山崎，2006）。また，1970 年代後半生まれの著者たちによる書評論文（上杉ほか 2008）は，影響力のある思想家の位置づけを地図化するという斬新な手法を通じて，近年の英語圏における地理学的関心が地理学者の独占物ではなく，広く人文・社会科学に共通して「空間と場所の思想」と呼べるようなものを生み出していることを知らせてくれている。

これらの論文と筆者たちの実践とは，今日の地理学の状況を，日本と外国，地理学と他分野との関係で捉えようとするという意図において共通しているように思われる。このことを確認した上で，本稿では，人文地理学の研究全般には直接関係するわけではないが（こう断言できるわけではなく，むしろこの辺の捉え方が人文地理学者のアイデンティティの問題と関わりあう），人文・社会科学全般に「言語論的転回」というのをもたらしてきた一つの概念である「言説」を取り上げて，この概念との立ち向かい方を，その研究に言語資料分析を含む著者に対して質問票に回答していただくことを通じて明らかにしたい。

Ⅱ　調査結果

1）知的コンテクストと人文地理学者のアイデンティティ

1.の質問はある意味ではテクスト分析から引き出せるものである。しかし，論文の発表年によっては，執筆当時は言説概念を用いていなくても，現在は言説分析だと思うかもしれない。逆に，執筆当時は深く考えずに軽率に「言説」という語を用いてしまったケースもあるだろう。また，この質問を契機に学術論文では書きえない言葉を引き出すことができるかもしれない。そのように考え，あえて質問に加えている（第 1～3 表）。しかし，結果的には前者のような意見はいくつか得られたものの，後者のような

第１表　問 1a「論文中で「言説」の語を用いていますか」の回答

はい	6
いいえ	10

第 2 表　問 1b「あなた自身はこの論文の（一部の）方法を言説分析だと思っていますか？」の回答

はい（条件付を含む）	10
いいえ	5
どちらともいえない	1

第 3 表　問 1c「その方法は既存のどんな研究から学んでいますか？」の回答

		分野	
		地理学内	地理学外
著者	日本	8	7
	外国	2	5
分野	日本	0	7
	外国	3	6

第 4 表　問 2b「この概念について思い浮かぶ思想家や研究者を挙げてください。」の回答

		分野	
		地理学内	地理学外
著者	日本	0	5
	外国	0	13

注：具体的な人名と回答者数は以下の通り。
ミシェル・フーコー：12 名
エドワード・サイード：3 名
ロラン・バルト，スチュアート・ホール，子安宣邦：各 2 名
ミハエル・バフチン，ヴィヴィアン・バー，ジェイムズ・クリフォード，ジャック・デリダ，ラクラウ＆ムフ，G. H. ミード，ソシュール，ヘイドン・ホワイト，P．ウィリス，浅田彰，東浩紀，上野千鶴子，桂島宣弘：各 1 名

回答は得られなかった。一方では，形式的なアンケートとは違い，日常的なメール交換の延長線上で貴重な意見を引き出せたことも事実である。

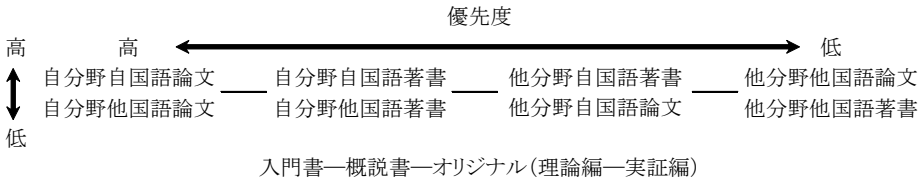
2.の質問からはいくつか重要な回答を得ることができた。自らの論文を言説分析だと認識していなくても，知識としての言説概念を理解しているということが分かる。また，どのような媒体（論文，著書，研究会，講義）を介して言説概念を理解したのか，また実際の研究上，方法論として参照した文献の種類の多様さ（地理学内外，国内外），などが確認できた（第 3 表）。

i　言説概念を学ぶ

まずは 2a および 2b の設問への回答から検討していきたい。設問 2b についての回答は第 4 表にまとめられる。これらの言説関連文献については成瀬ほか（2007）において，言説概念の概観で参照したものも含まれる。しかし，これは 1c の回答として後に触れるように，必ずしも回答者が自らの地理学的関心から参照したものとは限らない。このことは，2b の回答からもよく分かる。もう少し詳しくみてみよう。

当然のことではあるが，「言説」は地理学独自の概念ではない。しかし，わたしたちが地理学者，特に人文地理学者を自認する際，それは同時にその上位の人文・社会科学者としてのアイデンティティも有していると思われる。そのことは，地理学独自の概念や方法や考え方のみを学ぶのではなく，地理学研究を実践する上で，他の人文・社会科学の分野と共通する概念・方法・考え方を学ぶ必要を感じるのであって，それも含めてわたしたちは自らを人文地理学者と自認する。その際に言説概念は特定の学問分野に限定されるものではなく，回答のなかにも，社会学や歴史学，批評，哲学，文化人類学，カルチュラル・スタディーズ，エスノグラフィー，政治学などこの概念を多様な分野に結び付けていることが確認できる。

しかしながら，ここまではあくまでも回答者が人文地理学者というアイデンティティを，その上位の人文・社会科学者というアイデンティティと結び付けようとする意識が反映していると考えることができるだけであって，人文・社会科学に広く用いられている言説という概念を自らの人文地理学にも適用すべきだと考えているとは限らない。そもそも，2a の質問自体が，質問者の「人文地理学者は同時に人文・社会科学者であって，近年共通して用いられて



第１図　研究者として読むべき文献の分類

いるこの概念を知っていてしかるべき」という考えを回答者に強要しているとも考えられる。よって，無回答という応答可能性（＝責任）はその質問者の権威的な態度への消極的な反抗の意思表明であるともいえる。ただし，当然のように回答した者は，筆者たちと同様の考えを持っているのかもしれない。

その回答を細かくみてみると，この概念を重要視するかどうかは，人によって様々であることが分かる。それは文献のヒエラルキーとして理解することが可能である。わたしたちは研究者として読むべき文献に優先順位をつけている。もちろんそれは個々人によって異なるが，必要性の高い順から，第１図のように大まかに分類することができるだろうか。

もちろん，さらに他分野と他国語といった場合にも，個々人によって近く感じる分野，精通している言語といった具合に分野と言語にもヒエラルキーを与えているのかもしれない。

また，今回取り上げている「言説」という概念は，成瀬ほか(2007)でも示したように，概念自体は1960年代から論じられているものの，地理学で頻繁に取り上げられるようになったのは英語圏でも 1990 年代に入ってからであり，比較的新しいテーマでもある。その新しいテーマを学ぼうとするか，あるいは自らの研究に取り入れようとするかという問題も，地理学者であることを前提とした，その下位の自己アイデンティティと関わりがあると思われ，そうした個人が増えれば，それが集合アイデンティティとしての地理学者のアイデンティティの変容へと結びついてくる。それが顕著に現れるのは，回答のなかで言説概念を，ポスト構造主義，ポストモダニズム，文化論的転回などという言葉と結び付けようとする傾向にみてとることができる。こうしたことは，先述の阿部（2007）と上杉ほか（2008）の違いにも関連する。

上の回答結果でもう一つ取り上げておくべきことは，他分野で生まれ，盛んに利用されてきた言説概念を，他国語の地理学概説書や実証研究のオリジナル論文を通して学んでいる回答者の存在である。かれらは自身が人文・社会科学者であるという認識から言説概念を学ぶのではなく，そう認識する過去の地理学者が書いた文章を通じて，必然的に言説概念を学んでいると推察できる。もちろんそこにはフーコーなどの原著についての説明もあるので，それらを実際に読むこともなく概要を知ることができ，それは同時に地理学に適用された概念として，予め言説概念を学ぶことを意味する。このことは 1990 年代前半から自らの研究を開始した世代の回答者と，1990 年代後半に学部生－大学院生時代を過ごし，2000 年代に入って研究を開始した回答者という僅かな違いの世代間によっても異なっている。回答者は筆者たちに比較的世代が近いが，10 歳ほどの歳の差が影響する場面もある（第５表）。

第５表　回答者の出生年代

1950 年代	1
1960 年代	3
1970 年代	12

ii　言説分析を使う

筆者たちは回答者を，言語資料分析を行なった地理学研究者に限っているため，かれらのなかにはもちろん意識的に言説分析を行なっているものも含まれる。しかし，わたしたちはこの一連の試みで，い

わゆる言説分析研究だけを検討しているわけではない。それは，言説分析が日本の地理学においてはそれほど多くなされているわけではないということと，狭義の言説分析という方法を採用せずとも，広義の言説を対象にしている研究が増えているという実態を把握することでもある。自らの研究を言説分析と見做すか否か，ということは前項で検討した設問 1b からも知ることができるし，成瀬ほか（2007）のテクスト分析によって筆者たちの基準で判断することもできるが，重要なのはある論文を言説分析と見做すか否かの問題ではなく，言説分析が明らかにしようとすることが個々の論文に潜在的・顕在的に含まれているかどうかということである。しかもそれは，「この論文は言説概念を精確に理解し，方法を学び適用することで，より優れた研究になる」といった権威的・教育的なものになってはならないだろう。

よって，各論文著者の言説概念の理解の仕方を把握し，その上で自らの論文を言説分析と見做すか否かを問うことは意味のあることだと思う。そもそも成瀬ほか（2007）で確認したように，言説概念とは厳密なものではないし，極めて日常的な用語であり，また多様なものでもある。ただし，それを踏まえた上で，フーコーの主張を汲み取って理解することは，英語圏人文地理学がそうであったように学的営為にとって有意義であることは間違いない（Crampton and Elden，2007）。

著者本人が自らの研究を言説分析と見做しているか否かについては 1b の質問で直接問いかけている。しかし，言説分析を自認しているのは比較的若い世代の人に限られている。もちろんこれらはテクスト分析からも明らかになっている。その一方で，「狭い意味」ではそうとはいえないと断りながらも「言語資料を研究の中心」においているものを言説分析とするならば，そこに含まれるとする者もいる。同じことは「厳密に言えば違うかもしれません」や「語彙を整理した程度」という回答にもみてとれる。また，「今思えばそう思う」といった執筆時期との認識の違いや，「言説分析と言えなくもない」と捉え方に揺れがあったりすることもある。

このように，自覚と無自覚，広義と狭義というように，一概に言説分析といっても一枚岩的に捉えられないことは明白である。そして狭義の言説分析として最も必要とされるのは方法論的な議論である。まさにこれが欠けているのが日本の地理学の現状であるといえよう。しかし，それは何も地理学に限ったことではないようだ。成瀬ほか（2007）でも紹介した遠藤（2000）がいうように，社会学においてもフーコー的な意味合いで認識論的・方法論的議論が成立するのはある程度抽象的レベルにすぎないのかもしれない。

2）研究者間コミュニケーション

成瀬ほか（2007）でも指摘したことは本稿で分析している回答文にもあてはまる。つまり，現地調査でインフォーマントから引き出した言葉が絶対的なものではなく，さまざまな状況下で発せられたその場面での固有性を有しているように，今回配布した質問票でのやり取りによってわたしたちが知ることができたのは，各論文著者の確たる意識ではない。質問票は，ほぼ一方的に，突然の電子メールで，成瀬のアドレスから送信された一通のメッセージである。質問内容自体は簡単だが，回答期限が決められ，無記名のアンケートではなく，回答文そのままを回答者の名前つきで引用する可能性が知らされ，さらには無回答の場合もそのことを公表するという条件がつけられていた。なお，後述するような状況を踏まえ，最終的に本稿では回答者の氏名は公表せず，回答文からの直接引用も差し控えることとした。

こうした条件に対する反応は人それぞれである。ここではとりあえず質問者を 1970 年生まれの成瀬とするが，年齢や性別の違い，質問者との親交の程度，立場の違い（院生，研究生，非常勤講師，常勤教員，研究歴，教育歴），電子メール使用頻度，あるいは実際に自らの研究として，インフォーマントとの関わり，アンケートやインタビューを実施した経験があるかどうかなどによって，反応は大きく異なってくる。そのため，ここで分析が必要になってくるのは，質問票に対する回答そのものではなく，回答に付された電子メールが生み出すメッセージの意味内容である。

まず，2 人の回答者からは，この質問票を送付した論文著者の抽出理由を尋ねる質問があった。一人は「サンプルの規模・抽出の方法・基準」を尋ね，もう一人は「どのような意図でいくつかの論文が選

ばれたのかという説明」を要求した。この種の質問は，成瀬ほか（2007）の発表後も，間接的に筆者たちのもとに届けられた。しかし，筆者たちは言語資料分析に関する地理学論文を母集団のなかから抽出したわけではなく，基本的に「主要雑誌に掲載されたもの」という制限のもとで，できるだけ網羅したつもりである。また，今回の質問票送付先は成瀬ほか（2007: 570-571）の表 1 に掲載された著者全員ではないが，これもサンプル抽出という形ではなく，論文のなかで単に紹介した論文ではなく，検討・批判した論文著者に限定しているだけである。もちろん，成瀬ほか（2007）の表 1 の作成に当たっては筆者たち 3 人のあいだでも意見の相違があったように，質問票の回答者，および論文読者から寄せられたこうした質問からは，言説概念や「言語資料分析」という表現についての理解の相違を読み取ることができるといえよう。

言説概念の理解の多様性は質問の回答からも得られたものだが，回答外のメッセージからも知ることができる。そして，回答者から寄せられたこの 2 つの質問は，回答者自らも質問者となりえるという，今回の質問票送付という行為に関わる主体とその間の関係性が特殊であることを物語っている。現地調査を基礎とした地理学研究におけるインフォーマントと住民の関係と，今回の一連の試みにおける質問票送付者と受取人＝回答者との関係は大きく異なる。

質問 1a に対して当該論文を「読めば分かる」や「既に公表した論文がある」という理由を挙げて回答しなかった者や，「質問の仕方に関しては，正直なところ大変違和感を感じる」と冒頭に断り書きをした回答者も存在した。特に前者は，これらの返答を書くよりも，「はい」か「いいえ」で回答したほうが労力が省かれるにもかかわらず，乗り気でない回答においてより多くの文字を費やすというのは，そこに回答者の質問者への感情が介在している様子を確認できる。例えば，現地調査から得られたインフォーマントによる回答も，その内容に含まれる情報の分析に重点をおくならば，その回答が現地で和やかなのか，いやいやなのか，怒りに満ちて発話されたものなのかを論文読者は知ることがないが，それは回答の内容に関わる重要な事柄ではないだろうか。

また，「未回答の場合もそのことを公表する」という質問メールの文面についても，感情的な反応が多くみられた。質問者によるその言葉の意図は以下のようなものである。今回の質問は特殊なものであり，回答者がどのような論文を書いた人物なのかということを踏まえて回答を分析することに意義があり，回答結果は成瀬ほか（2007）の表 1 と同様の表でまとめることが可能だと考えていた。そうなれば，必然的に無回答の著者に関しては，その事実を表に書き込まなければならない。しかし，回答者によっては（そして無回答者のなかにも），この文言は回答率を上げるための脅迫にも似た方策だと取られたのかもしれない。実際に，無回答を公表することの意味を尋ねる者や，回答を「書く者の立場が常に棚上げ」されているという意見や，「無回答という選択肢が（実質的に）用意されていない形での質問の仕方に若干の疑問を持った」という回答者も存在した。何の問題もなく回答していただいた著者も多くいる一方で，回答しながらもこうした反応を寄せたことの真意は測りかねるが，無回答者の心情を推測する助けにはなる。

しかしそもそも，こうしたコミュニケーションは学的営為のなかでどんな位置を占めるだろうか。本質問で知ろうと思っていることは，研究者にとって知られるべきものではないと考えるかもしれないし，またこの方法を適切ではないと考えた人もいるようだ。そもそもわたしたちの通常の調査において，研究者と被調査者は対等な立場ではありえず，知る者と知られる者という関係のなかで，研究者は知る側という特権的な立場を悟られぬように細心の注意を払い，形式上は被調査者の立場が上にみえるように繕っている。しかし，今回の場合のように，調査者と被調査者が研究者という同等の立場にあり，また質問の内容が公的な場で発表された研究論文についてのものであるのであれば，その関係性はかなり特殊なものだといえる。内田（1986）でも，日本地理学会会員を対象にした異例のアンケート調査を行っているが，それはあくまでも被調査者が特異なだけであり，調査者と被調査者の関係性そのものは一般的なアンケート調査の枠内に収まっているようにみえる。

2）でみてきたことは，1）で言及した人文地理学者としてのアイデンティティとも関るのかもしれな

い。1）では上位概念としての人文・社会科学者としてのアイデンティティについて，そして人文地理学者のなかでも新たなテーマに取り組むかどうかの世代的アイデンティティについて考察した。それに対し，2）では地理学者の特徴としての現地調査における現地住民との調査上でのコミュニケーション，あるいは地理学者同士の研究に関するコミュニケーションについて論じた。これらは言語資料分析研究の現状についてだけではなく，地理学者としての現地調査に対するこだわりの程度についても指し示しているのかもしれない。もしそうであるならば，場合によっては地道なフィールドワークとは無縁な言語資料分析に取り組むということは，地理学者のアイデンティティとしてフィールドワークを重視するか否かということと大きく関係するといえるだろう。

Ⅲ　おわりに

言説概念は，特定の意味や考え方が社会のなかで普及していくことも意味する。言説概念は地理学における言語論的転回において重要な位置を占めている。その概念の日本の地理学者における普及の現状について，成瀬ほか（2007）と本報告の作業により，ある程度は明らかにできた。今後ともこうした実践は続けていきたい。

本稿は，学史研究ないし学問の社会学的な研究を目論んだものではないが，同時代的に発表される研究を評価するために，学史研究の方法を援用する方向性と可能性を示したのかもしれない。直接参照しているわけではないが，本稿は，Murdoch（2006）が近年のポスト構造主義地理学を検討するのに用いたアクター・ネットワーク理論の捉え方を示唆しているのかもしれない。アクター・ネットワーク理論では，アクターを人間主体に限定せず，さまざまなものの関係性のなかでものごとを複雑に捉えようとする。本稿においても，日本の地理学における言語資料分析研究が，さまざまな分野の，さまざまな媒体の文献参照体系から成り立っており，またその参照体系の構築は個々の研究者の地理学者としてのアイデンティティのあり方に規定されると同時に，参照体系の構築の仕方がさらにそのアイデンティティを構築していく，ということが示されたと思われる。

現在のところは類似した資料を分析対象としながらも，個々の研究者間のネットワークが強くは形成されず，この種の研究の認識論・方法論が深まっていない状況だといえる。それに対し，筆者たちの試みはその現状を把握するのと同時に，その希薄なネットワークに介在するアクターを演じることによって，新たな方向性を導こうとするものである。しかし，その方向性は，特定のベクトルを指しているわけではなく，われわれの試みが新たなアクターとして加わるという再帰的なネットワークの複雑性ゆえに，規定することはできない。

本稿で取り上げた，既出の論文著者に対する質問票の送付とその回答という実践は，私たち研究者の自明視された研究活動の一部に対するささやかな問いかけであった。ただ，その分析からは，特定のテーマの研究における文献参照のあり方を部分的に知ることができた。今後も，学史的あるいは学問の社会学的な考察を進めていくことで，研究活動の実践や認識について洞察を深め，また別の形で新しい実践を意図的に生み出し，研究の進展を促していくことができるのではないだろうか。

付記

本稿の内容については，2008 年の日本地理学会春季学術大会（於：獨協大学）において発表した。その際，土居浩氏（ものつくり大学）より貴重な質問をいただいた。また，学会発表後，二村太郎氏（駒澤大学非常勤講師）からも，筆者たちの試みに対して示唆に富むコメントをいただいた。記して感謝いたします。

注

1）上記論文については，成瀬ほか（2007）の表 1 を参照されたい。

参考文献

阿部和俊（2007）：人文地理学のアイデンティティを考える――都市地理学を中心に――．人文地理，59（5），432-446.

泉谷洋平（2004）：地名のない地理学．空間・社会・地理思想，(9)，2-18.

泉谷洋平（2006）：ジオグラフィック・マトリックス・リローデッド――模範例としての学会発表表題――．空間・社会・地理思想，(10)，2-19.

上杉和央・村中亮夫・花岡和聖・埴淵和哉（2008）：空間・場所をめぐる思想家の「地図化」――Key thinkers on space and place を題材に――. 地理科学, 63(1), 38-47.

内田順文（1986）：都市の「風格」について――場所イメージによる都市の評価の試み――．地理学評論，59 A(5)，276-290.

遠藤知巳（2000）：言説分析とその困難――全体性／全域性の現在的位相をめぐって――．理論と方法，15(1)，49-60.

成瀬　厚・杉山和明・香川雄一（2007）：日本の地理学における言語資料分析の現状と課題――地理空間における言葉の発散と収束――．地理学評論，80(10)，567-590.

山崎孝史（2006）：地理学のポリティクスと政治地理学．人文地理，58(4)，41-62.

Crampton, J.W., Elden, S. (2007) : *Space, knowledge and power: Foucault and Geography*.　Ashgate Publishin, Hampshire.

Murdoch , J. (2006) : *Post-structuralist geography*. Sage, London.